

## 恋愛関係における愛情のスタイルと対人的ネットワーク

### The Relation of Romantic Love Styles and Interpersonal Network

吉 山 尚 裕<sup>1)</sup>

Naohiro Yoshiyama

#### ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relation of love styles in heterosexual intimate relationships and the size of interpersonal networks. One hundred and ninety-three female college students responded to a questionnaire asking about the six love styles based on Lee's theory (1977) and the size of interpersonal networks with male or female friends. Results showed (1) the network size of the students having a lover or a boyfriend was not smaller than that of the students who did not have such an intimate relationship (a mere friend or one-sided love), and (2) the score of Mania, a style of love, was negatively related to the network size with female (own sex) friends. These results suggest that although a heterosexual intimate relationship is not always closed or exclusive, it might become closed or exclusive when the romantic love feeling of Mania is too strong.

Key words: romantic love, Lee's love styles theory, interpersonal network, exclusivity, heterosexual relationship

#### 問 題

本研究の目的は、恋愛関係の成立、および、交際相手に抱く愛情のスタイルの違いが、本人の対人的ネットワークとどのような関連をもっているのかを検討することである。

恋愛は、多くの青年にとって高い関心事であり、当事者にとって時には深刻な悩みや危機の源泉ともなり得る重要な対人関係である。また、恋愛関係では、喜びや嬉しさ、恥ずかしさ、悲しみや苦しみ、嫉妬や独占欲など様々な感情が生じ、それが交際相手に対する行動と密に結びついている。こうした理由から、近年、社会心理学的な観点からも、恋愛に関する研究が進められるようになってきた(松井, 1993a)。

さて、これまでの研究では、恋愛・異性愛には個人差や交際の進展段階によって多様なスタイルが存在すると考えられるため、愛情の内容をいくつかに区別して把握しようとする試みがなされている(Rubin, 1973; Lee, 1977)。その中で、Lee (1977)は、小説や記録の分析、および

1) 本研究の結果は、日本グループ・ダイナミクス学会第44回大会(1996年, 於・広島大学総合科学部)で報告した。調査の実施と結果の分析にあたっては、清田幸子さんと堤 博子さん(大分県立芸術文化短期大学1995年度卒業)の協力を得た。記して感謝する。

青年を対象とした面接調査の結果に基づいて、「恋愛の色彩理論」と呼ばれる類型論を提出している。この理論によれば、愛情のスタイルは、基本型としての Eros（美への愛）、Ludus（遊びの愛）、Storge（友愛的な愛）、そして、混合型としての Mania（狂气的な愛）、Agape（愛他的な愛）、Pragma（実利的な愛）の6つのスタイルに分類される（Table 1 参照）。

その後、Hendrick & Hendrick（1986）は、Lee の提唱した6つの愛情スタイルを測定するための尺度（LAS）を開発した。わが国では、松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田（1990）が、Hendrick らの尺度を日本の大学生に適合するように改訂し、恋愛意識尺度（LETS-2）を作成している。このように恋愛のスタイルに関する尺度構成が進められる一方、中村（1991）は、大学生を調査対象にして、恋人との交際期間や親密度から愛情スタイルを比較し、交際長期群が短期群より Eros 得点が高く、高親密群が低親密群よりも、Agape、Eros、Storge の得点が高いという結果を得ている。さらに、松井（1993b）は、交際行動の進展段階に伴う愛情スタイルの変化を検討し、交際が深まるにつれて Mania、Eros、Agape 得点が高まる一方、Ludus 得点は中期以降低下していくこと、また、そうした交際の進展に伴う愛情スタイルの変化には、性差が存在することを報告している。

これらの諸研究は、恋愛・異性愛をいくつかの下位尺度に分け、恋愛関係にある男女の意識の変化、あるいは、親密化の過程を検討してきたことを示すものである。しかしながら、これらの研究を概観して気づくことは、恋愛関係を個人が取り結んでいる多様な人間関係の総体、すなわち、対人的なネットワークの一つとして把握しようとする視点が欠落していることである。恋愛が、当事者の取り結んでいる人間関係全体の中で生じる重要な部分的変化であるとするれば、「恋愛関係の成立、あるいは、交際相手に抱く愛情の違いが、当事者の対人的ネットワークをどのように規定したり、逆に、どのように規定されるのか」という問いに答えていくことも恋愛研究の大きな課題であろう。

ところで、この問いに関連した論考は、従来、社会心理学よりも青年心理学でなされている。例えば、西平（1965）は、“開いた愛と閉じた愛”、詫摩（1973）は、“内閉的世界の成立と共存感情”という用語を用いて、恋人同士が第三者の介入を排して、二人だけの内閉的、排他的

Table 1  
Lee（1977）の恋愛類型論における各類型の特徴（松井,1993b）

名 称	特 徴
Mania (狂气的な愛)	独占欲が強い。嫉妬、憑執、悲哀などの激しい感情を伴う。
Eros (美への愛)	恋愛を至上のものと考えており、ロマンチックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し、強烈な一目惚れを起こす。
Agape (愛他的な愛)	相手の利益だけを考え、相手のために自分自身を犠牲にすることも、厭わない愛。
Storge (友愛的な愛)	穏やかな、友情的な恋愛。長い時間をかけて知らず知らずのうちうちに、愛が育まれる。
Pragma (実利的な愛)	恋愛を地位の上昇などの手段と考えている。相手の選択においては、社会的な地位の釣合など、いろいろな基準をたてている。
Ludus (遊びの愛)	恋愛をゲームと捉え、楽しむ事を大切に考える。相手に執着せず相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と恋愛できる。

な世界をつくろうとする傾向を指摘している。だが、これらの論考は、恋愛の心理に一つの洞察を与えているとはいえ、十分な立証を得ていない。他方、最近の恋愛研究では、嫉妬や排他性に関する実証的な研究も進められてはいるものの (Salovey & Lodin, 1989; 深澤・篠崎・越川, 1992; 増田, 1994)、これらの研究は、主として、恋人を他者に奪われまいとする意識や行為、あるいは、本人が恋人以外の異性に接近しまいとする意識や行為に着目したものである。したがって、これらの研究もまた、本研究が焦点をあてようとする恋愛関係の成立と対人的ネットワークの関連、あるいは、交際相手に抱く愛情のスタイルと対人的ネットワークの関連について検討したものではない。

以上のような問題意識に基づき、本研究では、第1に、恋愛関係の成立の有無と対人的ネットワークとの関連について検討する。ここで、対人的ネットワークに関しては、そのサイズ、すなわち、回答者が親しい関係を維持している同性・異性の友人の数を検討する。従来の論考のように恋愛関係が、内閉的・排他的な特徴をもっているとするれば、恋人や親密な異性がいる場合の方が、そうでない場合よりも対人的ネットワークが狭い(サイズが小さい)であろう。第2に、本研究では、恋愛関係が成立している場合、Lee の提唱する6つの愛情のスタイルと対人的ネットワークのサイズとの間にどのような関連が認められるかを検討する。この点に関しては、独占欲や嫉妬、憑執といった激しい感情を伴う Mania が強い場合にネットワークが狭くなると予測される。

## 方 法

### 調査対象者

調査は、「青年の人間関係の調査」として、講義時間中に無記名方式で実施された。調査時期は、1995年10～11月。大分県内にある2つの短期大学の学生女子193人が回答者となったが、そのうち、「親しい異性」として想起してもらった相手が、恋人・ボーイフレンド(BF)・片想い・親友・友だちのいずれにも該当しない者、および、欠損値を含む者のデータを分析から除いたため、分析対象者は140人(平均年齢は19.7歳)となった。回答者が想起した相手の異性との関係は、恋人44人、BF18人、片想い21人、親友16人、友だち41人であった。

### 質問紙の構成

質問紙は、大別して、「対人的ネットワーク」と「恋愛のスタイル」に関する項目群から構成されている。まずフェイスシートとして、回答者に自分の性別と年齢を記入してもらった後、「対人的ネットワーク」に関する質問に回答を求め、次いで、現在最も好意を抱いている異性に対する「愛情のスタイル」について回答を求めた。

#### 1. 対人的ネットワーク

浦・南・稲葉(1989)が作成したソーシャル・サポート尺度の質問項目を一部修正して用いた。すなわち、以下に示す10項目に該当する友人の数がどのくらいか、同性・異性の場合に分けて、「まったくいない(1)」「あまりいない(2)」「少しはある(3)」「何人もいる(4)」「かなりの数いる(5)」の5段階評定を求め、その合計点をもってネットワーク・サイズの指標とした。

質問項目は次の通りである。Q1. 折りあるごとに行き来する友だち。Q2. 一緒に会って、とても楽しく時を過ごせる友だち。Q3. 何かもめごとが起こった時、気安く相談に行ける友だち。Q4. さびしい時など電話をしたり、訪ねていっておしゃべりができるような友だち。

Q 5. 急にお金が必要になったとき気がねなく借りられる友だち。Q 6. あなた自身のことをかってくれたり、高く評価してくれる友だち。Q 7. 自分自身に個人的な心配ごとや不安があるときに、どうすればよいか親身に助言してくれる友だち。Q 8. 家族以外で100パーセント信用できる友だち。Q 9. いっしょに買い物につきあってくれる友だち。Q 10. レジャー施設や映画を観に行く友だち。

## 2. 愛情のスタイル

次に、回答者に、“恋人（彼）や好きな人、もしくは家族以外で最も親しい異性”を一人想起してもらい、その異性の年齢、および、その異性が自分にとって、「恋人・BF・片思い・親友・友だち・その他」のいずれに該当するか選択させた（ここで、恋人またはBFを選択した場合には、その異性との交際期間についても回答を求めた）。そして、松井ら（1990）による恋愛意識尺度（LETS-2）の中から選択した18項目について、「まったくあてはまらない(1)」「あまりあてはまらない(2)」「どちらともいえない(3)」「少しあてはまる(4)」「よくあてはまる(5)」の5段階評定を求めた。質問項目は以下の通りである。

Mania：Q 3. 彼が私以外の異性と楽しそうにしていると、気になって仕方がない。Q 5. 彼は私だけのものであってほしい。Q 9. 彼からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じたときには、悩み苦しむ。

Eros：Q 4. その人と一緒にいると恋愛小説の主人公になったような気持ちになる。Q 8. 彼の外見は、私の好みにピッタリだ。Q 12. 彼と一緒にいると夢の中にいるようだ。

Agape：Q 1. 彼の望みをかなえるためなら、私自身の望みはいつでも喜んで犠牲にできる。Q 7. 私自身の幸福よりも、彼の幸福が優先しないと、私は幸福になれない。Q 11. たとえ彼からまったく愛されなくても、私は彼を愛していきたい。

Storge：Q 2. 私は彼との友情を大切にしたい。Q 10. 彼とは、友人関係から自然に恋人関係へと発展した（させたい）。Q 18. 私がかもっとも満足している恋愛関係は、よい友情から発展してきた。

Pragma：Q 13. 恋人を選ぶときには、その人が私の家族にどう受け取られるかを一番に考える。Q 15. 恋人を選ぶとき、その人の学歴や育ち（家柄）が、私と釣り合っているかどうかを考える。Q 16. 恋人を選ぶときには、その人に経済力があるかどうかを考える。

Ludus：Q 6. 彼とはあまり深入りせず、すっきりした関係でありたい。Q 14. 特定の交際相手を決めたくないと思う。Q 17. 交際相手から頼られすぎたりベタベタされるのが嫌である。

## 結 果

### 1. 異性との関係性と愛情スタイル

恋愛関係の成立、および、愛情スタイルと対人的ネットワークの関連を分析する前に、まず異性との関係性の違いによって愛情のスタイルに差異が見られるか検討しておこう。Table 2（上段）には、恋人・BF・片思い・親友・友だち別に見た愛情スタイルの平均(SD)が示されている。分散分析の結果、Pragmaを除く5つの愛情スタイルの得点で有意差(すべて $p < .01$ )が認められた。とくに、Mania、Eros、Agapeにおける群間の差が高度に有意であり、全体的には、恋人・BF・片思いに対する得点が、親友・友だちに対する得点よりも高かった。こうした傾向は、Storgeにも見られる。ただし、Ludusについては、逆に、友だちに対する得点が、

恋愛関係における愛情のスタイルと対人的ネットワーク

恋人やBFに対する得点よりも高かった。これらの結果は、回答者が異性との関係をどのように認知しているかによって愛情のスタイルに差異が存在することを示している。また、本研究では、松井ら（1990）が作成した恋愛意識尺度（LETS-2）の中から質問項目を選択して用いたが、それらの項目群は、異性との（認知された）関係の違いによる愛情スタイルの差異を識別しているといえよう。

2. 恋愛関係の成立と対人的ネットワーク

それでは、恋愛関係の成立の有無とネットワーク・サイズとの関連について分析した結果を述べる。ここでは、恋人・BFのいる回答者を恋愛関係が成立している者、恋人・BFのいない回答者を恋愛関係が成立していない者と見なしてネットワーク得点を比較する。なお、ネットワーク得点の全体平均は、同性との得点（ $\bar{X}=32.1, SD=4.72$ ）が、異性との得点（ $\bar{X}=22.4, SD=7.34$ ）よりも高かったが、この結果は、回答者（女子学生）の友人が、異性よりも同性に多いことを反映したものであろう。

Table 2（下段）に示すように、同性とのネットワーク得点については、群間の差は傾向 [ $F(4,139)=2.42, p<.10$ ] にとどまり、恋人やBFのいる回答者と恋人やBFのいない回答者との間に有意な差は認められなかった。次に、異性とのネットワーク得点については、分散分析の結果、群間に有意な変動が認められた [ $F(4,139)=6.89, p<.01$ ]。しかし、多重比較

Table 2  
異性との関係の違いによる愛情スタイル、および、対人的ネットワークの平均得点

	特定された異性との関係					F	多重比較 (Tukey, 5% 水準)
	恋人 (A)	B F (B)	片思い (C)	親友 (D)	友だち (E)		
愛情のスタイル							
Mania	11.8 (2.60)	9.6 (2.64)	10.7 (2.29)	6.0 (2.19)	6.1 (3.20)	30.43**	A,B,C > D,E ; A > B
Eros	9.4 (2.59)	8.3 (1.99)	10.8 (2.60)	6.5 (1.97)	6.0 (2.62)	18.07**	A,C > D,E ; B > E ; C > B
Agape	9.5 (2.28)	8.2 (2.20)	10.4 (2.62)	7.1 (2.63)	5.7 (2.90)	17.27**	A,C > D,E ; B > E
Storge	11.3 (2.59)	11.8 (1.77)	11.2 (2.79)	9.4 (2.48)	9.5 (2.45)	5.03**	A,B > E
Pragma	7.4 (2.79)	8.2 (3.22)	8.0 (2.92)	6.9 (3.14)	7.6 (2.76)	0.69	
Ludus	7.8 (2.81)	8.6 (2.66)	8.8 (2.34)	9.5 (1.79)	9.9 (2.54)	3.93**	E > A
対人的ネットワーク							
同性	31.4 (4.63)	33.8 (3.49)	32.9 (3.94)	34.1 (6.22)	30.9 (4.68)	2.42	
異性	25.4 (8.01)	21.2 (5.47)	20.4 (7.74)	26.8 (3.92)	19.1 (6.17)	6.89**	A,E > C,E
n	44	18	21	16	41		

N=140, ( ) = SD, \*\* ... p < .01.

Table 3  
対人的ネットワークのサイズと愛情スタイルとの関連 (恋人・BFのいる回答者)

	同性とのネットワーク			F	異性とのネットワーク			F
	狭い	中間	広い		狭い	中間	広い	
Mania	12.3 (2.06)	10.4 (2.78)	10.5 (3.13)	3.77*	11.6 (3.02)	10.8 (2.56)	11.3 (2.88)	0.46
Eros	9.8 (2.28)	8.7 (2.48)	8.6 (2.62)	1.58	8.9 (2.55)	9.3 (2.10)	8.9 (2.84)	0.16
Agape	9.6 (2.25)	8.8 (2.36)	8.8 (2.38)	0.74	8.8 (2.48)	9.0 (1.90)	9.3 (2.66)	0.26
Storge	11.7 (2.46)	11.0 (2.43)	11.6 (2.28)	0.49	11.3 (2.19)	11.6 (2.10)	11.3 (2.82)	0.10
Pragma	7.5 (3.37)	7.4 (2.87)	8.1 (2.41)	0.25	7.2 (3.19)	8.1 (3.24)	7.5 (2.39)	0.48
Ludus	7.6 (2.52)	8.1 (2.56)	8.6 (3.33)	0.66	7.5 (2.67)	8.2 (2.76)	8.3 (2.93)	0.34
n	23	21	18		15	24	23	

N=62, ( ) = SD, \* ...  $p < .05$ .

(Tukey法, 5%水準)の結果は、恋人・異性の親友がいる回答者の得点が、片思い・友だちのいる回答者の得点よりも高いことを示すものであり、恋人・BFのいる回答者の得点が、それらがない回答者の得点よりも低いことを示すものではなかった。

### 3. 愛情のスタイルと対人的ネットワーク

愛情のスタイルとネットワーク・サイズの関連については、恋人、または、BFのいる回答者62人(平均年齢は19.6歳)を分析対象とした。そして、同性、異性それぞれのネットワーク得点の分布に基づき、これら62人の回答者を「狭い」「中間」「広い」の3つの群に分け、愛情スタイルの得点を比較した。なお、回答者が恋人・BFとして交際している相手の平均年齢は21.1歳、レンジは16~28歳。交際期間は1年未満32人、1年以上26人(無答4人)であった。

Table 3には、同性、異性とのネットワーク・サイズから見た交際相手に対する愛情スタイルの平均得点(SD)を示している。異性とのネットワーク・サイズと愛情スタイルとの関連を見ると、Mania~Ludusの6つの得点のいずれにも有意な差は認められなかった。しかし、同性とのネットワーク・サイズと愛情スタイルとの関連については、Mania得点で有意な変動が認められ [ $F(2,61)=3.77, p < .05$ ]、同性とのネットワークが狭いほどMania得点が高く、恋人やBFを独占しようとするような強い感情を抱いていることを示している。こうした傾向は、統計的には有意水準に達していないが、Eros得点にもうかがえる。

## 考 察

本研究では、恋愛関係の成立の有無、および、交際相手に対する愛情のスタイルの違いが、対人的ネットワークと密に関連していると考え、女子学生を対象にして調査を実施した。

結果の分析では、まず、異性との関係性の違いによって愛情のスタイルに差異が見られるか

検討した (Table 2・上段)。その結果、Mania、Eros、Agape では、回答者が、異性を恋人・BF・片想いとして特定している場合が、親友・友だちとして特定している場合よりも得点が高く、愛情のスタイルが異なることを示している。ここでは、片想いの相手がいる回答者の Mania、Eros、Agape 得点が、恋人やBFのいる回答者の得点と同じか、それ以上に高かったことも興味深い。この結果は、片想いの場合、現実に相手と交際していないだけに、相手を美化したり (Eros)、夢中になりやすく (Mania)、好意の返報性がないだけに自己犠牲的な感情が生じやすい (Agape) と解釈できよう。この結果は、楠見 (1987) が、Rubin (1970) の熱愛尺度を用いて得た結果とも整合しており、片想いの関係が、恋人やBFの場合と同じか、それ以上に強い恋愛感情に支えられていることを示唆している。

それでは、恋愛関係の成立の有無、および、愛情のスタイルと対人的ネットワークの関連について考察してみよう。従来、青年心理学でなされてきた論考のように (e.g., 詫摩, 1973)、恋愛関係が“内閉的”であるとすれば、恋人やBFのいる回答者は、恋人やBFのいない回答者よりも、同性・異性とのネットワーク・サイズが小さいと予想される。しかし、本研究の結果では、Table 2 (下段) に示すように、同性、異性両方のネットワークについて、恋人やBFのいる回答者の得点が、恋人やBFのいない回答者の得点よりも低いという結果は得られなかった。これらの結果は、恋愛関係が必ずしも“内閉的”な関係ではないことを示すものであろう。とくに、異性とのネットワークは、恋人や異性の親友がいる回答者の得点が他の回答者の得点よりも高かった。この結果は、恋人や異性の親友の存在が、当時者のネットワークの中に明確に位置づけられていることを示すものと解釈されるが、より積極的には、次のように考察することもできよう。一つは、恋人や異性の親友を仲介して、異性とのネットワークが広がるという解釈である。具体的には、恋人や異性の親友から、その友人 (異性) を紹介されたり、グループで交際する機会が増えることなどがあげられる。もう一つは、逆に、異性とのネットワークが広い場合、その中から親密な異性関係が生まれやすいという解釈である。本研究の分析は相関的なものであり、そうした因果関係の問題については今後の検討が必要だが、現実には、両者の間には相互に規定し合うダイナミックな関係が存在すると思われる。

ところで、本研究で得られた結果のうち、最も重要な結果は、交際相手に対する愛情のスタイルとネットワーク・サイズとの間に一定の関連が認められたことであろう。すなわち、恋人やBFに向けられる Mania の強さは、同性とのネットワーク・サイズと負の関連をもっていた (Table 3)。この結果は、恋人やBFに対して、独占欲や嫉妬、憑執といった激しい感情をいだいている場合、同性とのネットワーク・サイズが狭まることを示唆している。すでに述べたように、従来、恋愛関係の特徴の一つに、内閉性や排他性が指摘されてきたが、そうした論考は、Lee (1977) の恋愛類型論の観点からいえば、愛情スタイルの中でも、とくに Mania が強い場合について考察したものと見ることができよう。また、この結果は、Mania が強い場合、当事者を精神的にサポートする同性友人の数が少なくなるか、あるいは、少ないと認知されやすくなることを示しており、恋愛が、深刻な悩みや危機の源泉となる機制について示唆を与えるものである。

さらに、本調査では統計的には有意水準に達しなかったものの、Mania のほかに Eros や Agape とネットワーク・サイズとの間に関連がうかがえることにも注意しておきたい。松井 (1993b) は、多次元尺度構成法を適用し、Mania・Eros・Agape が恋愛の一般的な意識としてまとめられることを報告しているが、その結果と考え合わせれば、Eros や Agape とネット

ワーク・サイズとの間にも関連が存在すると予想される。

以上のように、本研究から、恋愛関係は、これまで指摘されてきたように必ずしも“内閉的”な関係であるとはいえず、そうした特徴が生じるのは、恋人やBFに対してマニャックな意識や感情を強く抱いている場合であることが示唆された。今後は、愛情のスタイルと対人的ネットワークの関係について、その規定性を含め、幅広い検討が求められる。そのためには、ネットワークの様相をより詳しく測定することはもとより、その時系列的な把握やカップル単位での把握を試みる必要があるであろう。

### 引用文献

- 深澤道子・篠崎信之・越川房子 1992 嫉妬・羨望に関する基礎的研究(1)―大学生の嫉妬恋愛について―  
日本心理学会第56回大会発表論文集, 650.
- Hendrick, S.S. & Hendrick, C. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.
- 楠見幸子 1987 女子短期大学生の恋愛感情体験に関する研究―交際目的による相違について―  
九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **32**, 65-70.
- Lee, J.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- 松井 豊 1993a 恋心の科学(セレクション社会心理学12) サイエンス社
- 松井 豊 1993b 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, **64**, 335-342.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立川短期大学紀要, **23**, 13-23.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- 西平直喜 1965 友情・恋愛 大日本図書
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Salovey, P., & Rodin, J. 1989 Envy and jealousy in close relationships. In C.Hendrick (Ed.), *Close relationships (Review of Personality and Social Psychology, 10)*. Newbury Park:Sage Publication, Inc. Pp.221-246.
- 詫摩武俊 1973 恋愛と結婚 依田新・他(編) 現代青年心理講座5 現代青年の性意識 金子書房  
Pp.141-193.
- 浦 光博・南 隆男・稲葉昭英 1989 ソーシャル・サポート研究―研究の新しい流れと将来の展望―  
社会心理学研究, **4**, 78-90.